

町指定無形民俗文化財「下旦祇園祭」

復興50周年の記録



令和5年7月15日、下旦祇園祭が行われました。

右田下旦区の八雲神社は、須佐神社（福岡県行橋市）よりご分霊を勧請したのが始まりで、疫病退散、村勢新興を願う祇園社です。

山鉾は、昭和36年に焼失し、一時中断しましたが、昭和48年に再興。今年は復興50周年の節目でした。

現在、山鉾は大小2基あり、大山鉾は昔話などの場面に合わせた姿の人形、ミニ山鉾はキャラクター人形を、色紙と竹でこしらえた花や波しぶきを表すパイパイ（竹飾り）とともに飾られる郡内唯一の飾り山鉾です。

祇園祭に向けての準備は1か月前より始まりました。囃子を練習する竹笛の音色や太鼓の響きが集会所から聞こえ、近くの作業場では下旦青壮年による山鉾制作が進められます。

飾りに使う竹や、山鉾を固定するカズラをとりに山へ入ったり、山鉾の車輪として使う松の木を、境内の水タンクから取り出す力仕事その他、屋形作りや人形作り、飾りの花びら1枚1枚を切り取っていく細かな作業まで、分担し、毎晩続く作業。経験者が、若い人たちに教えながら作業をすすめています。

青壮年らは日中、普段の仕事もあり、大雨被害の道路や線路復旧に携わりながらという人もいて、きつと休む間はなかったことと察しますが、夜は作業場が集まり、汗を流しながら作業を続け、時おり、気が立つことがあっても、また皆で笑い、語りながら懸命に山鉾制作に励む光景をたくさんみました。そして、花づくりの仕上げは松寿会が担い、地区の人がひとつになつてつくりあげる祇園祭。

祇園祭当日は、ねじり鉢巻きにお揃いの法被に身を包んだ青壮年衆。八雲神社の神事で気を引き締め、山鉾の巡行へ向かいました。

祇園祭後日、20周年を迎えた玖珠大祭への特別参加や、須佐神社の今井祇園とも交流を深め、刺激を受けた下旦青壮年。すでに来年の祇園祭へ向け構想が始まっています。

こうして、小さな一地区ながらも立派な山鉾と伝統が続いている下旦の祇園。そこには、自分たちの山鉾に誇りを持ち、地域の人のつながりを大事にする姿がありました。地区内外から観客が集まる下旦祇園祭は、毎年7月第3日曜日の前日に行われます。

（九重町文化財調査委員 音成葉子）



鳥居をくぐり、長い石段を上ると下旦八雲神社がある。拝殿にて小野日隆神官による神事がとり行われた。神事後、山鉾の昼巡行。いよいよこれからという緊張感に包まれる。



松寿会が集まり、山鉾に飾る花を仕上げる。花は夜の巡行が終わると観覧客などに配られ、玄関先に飾って厄除けにする。今年は玖珠大祭への参加もあり、作る花の数は例年より多かった。



地区内にある介護施設では、山鉾をとめてお披露目。強い日差しと長い巡行で汗はびしょりだが、この日は風もあり、囃子の音色とともにゆったりと澄んだ空気が流れていた。



下旦子ども祇園囃子による練習も日々行われた。大人に教わり、みるみるうちに上達する子どもたち。笛、太鼓、かねの音が揃うようになると顔もキリッとしまってしまう。



夜巡行。山鉾の練りで祇園祭を締めくくる。青壮年衆は残った力をふりしぼって山鉾をまわり観客を魅了。青壮年OBや有志らによって新調した後方ののぼり旗も優美に、はためいていた。



昼巡行。休憩所では地区の人が、青壮年衆に冷たい飲みものなどをふるまい労う。沿道には山鉾や囃子の音色にひかれて人が集まり、初穂料を奉納する住民には御神酒と御幣が配られた。